

サカ・クシャン時代に於けるマトゥラーの 宗教事情に関する一考察

高橋 堯 英

はじめに：

法華経の「開会」の思想は、総てのものの存在意義を認める社会に育まれた思想であると言われている。北インドの中心都市マトゥラーはサカ・クシャン朝期に、政治・経済・文化の中心として栄えた都市であったが、この都市は北インドと西北インドとの接点にあるという地理的特徴から、西北インドからインドに覇権を確立しようとする異民族の政治的拠点として栄えた。ポスト・マウルヤ期に、インド・ギリシア人、サカ族、パフラヴァ族、クシャン族といった異民族が次々に支配者として現れ、異民族支配者らの子孫たちもインド名を採用して土着化しつつ、土着の人々と異民族の子孫たちが混在融合していくような環境が存在していたと考えられている。異民族支配下にあった西北インド・北インドは、経済的にはローマとの通商などもあり繁栄期にあったといわれているが、その経済繁栄を背景に、マトゥラーではさまざまな宗教が互いの存在意義を認めながら、独立に、或いは他と融合する形で活発な活動を展開していた。この小論では、北インドの中心都市マトゥラーの市内や郊外から発見された碑文や出土品を手がかりに、この特異な社会に栄えた諸宗教の活動を検証してみようと思う。

マトゥラー市における宗教活動：

先ず、マトゥラー市の市内から発見された碑文や遺品を見ていくと、1910年に Isapur 近くのヤムナー川の河床から、バラモン教の供儀の祈念として

建立された柱 (*yūpa*, sacrificial post) が一基発見されている。この柱に刻まれた碑文によると、カニシカ暦の第24年、即ちカニシカ王の後を継いだヴァーシシカ王の即位直後の夏の第4月の30日に、ドロナーラというバラモンによって12日間続いた供儀が催され、供儀で用いられた木製の柱を模した石柱がこの大きな供儀を記念するために建立されたことを伝えている⁽¹⁾。十二日間も続く供儀の実践から考えてみても、バラモンたちの有した大きな力を推測することが出来よう。更に、マトゥラー市のチョウラシーと呼ばれるジャイナ教の寺院付近の井戸からは、カニシカ暦28年の年代を有するブラーフミー碑文が発見されている。この碑文には、フヴィシカ王の治世に、カラサレーラとヴァカナという封建領主二名が、550プラーナという金子を小麦粉製造業者のギルドともう一つのギルドの各々に投資し、それらのギルドからの利子によって日々100人のバラモンに食事を提供し、同時に、若干量のひき割り、塩、そして野菜五包みを、飢餓に苦しむ打ちひしがれた人々のために提供したと伝えている⁽²⁾。ヴァルナの最高位にあるバラモンたちが、クシャトラパというタイトルを有する封建領主からの経済支援を、間接的にせよ受けて生活していた様がよく解る資料である。従って、このような、組合に投資された金額からの利子によって恒常的にバラモンたちを支えるというシステムが、大きなバラモン教の寺院では行われ、バラモンたちの生活が維持されていたことが考えられる。更に、同じ願文には、供養を為したクシャトラパたちが、その供養によって得られる福德をフヴィシカ王に回向することが述べられており、クシャン王朝下のバラモン教が公的に地方のクシャトラパたちから支援されていたことが明らかである。同じようなバラモンに対する供養を記述した願文が、マトゥラー郊外のトークリー・ティーラーで出土したクシャン王侯像台座銘文にも認められる⁽³⁾。因みに、『マヌ法典』は、マトゥラー地域を *Brahmarshideśa* (バラモンの聖者の国) と呼んで尊んでおり⁽⁴⁾、マトゥラーとバラモン教との密接な関係を示している。

マトゥラーはヒンドゥー教のなかでもクリシュナ信仰の中心として有名である。マトゥラー市の西13.2 kmの地点の市内のモーラーの井戸からは、Mora Well Inscription⁽⁵⁾が発見されており、マトゥラーとクリシュナ信仰との関係を明らかにしている。この碑文によると、サカ王ショーダーサの時代に、クリシュナの出身部族であるヴリーシニー族の五人の勇者の像が建立されていたことが記されている。さらに、他のマトゥラー出土碑文には、サカ王ショーダーシャの時代に、ヴァスという人物がバガヴァット・ヴァースデーヴァの寺に建物と門を建立したと伝え⁽⁶⁾、サカ時代にヴィシュヌ信仰の寺院が存在したことが示されている。また、ヴィシュヌ信仰は当時民間に広まり、インド・ギリシアのタキシラ王アンティアルキダスがヘリオドロスという特使をウヅジャインに使わし、ベスナガルにヴィシュヌ神の乗り物であるガルダを柱頭に頂く柱を建立した事例がよく知られており、外国人勢力の中にもインドの宗教を信奉するようになった者がいたことの例としてよく取り上げられる。更に、クシャン王家の廟があったと言われ、ヴィーマやカニシカなどのクシャン王侯像が発見されたマートの遺跡は、ヴィシュヌの神妃シュリーを祀った寺で、バラモンたちが管理していたとする説もあり⁽⁷⁾、当時のヴィシュヌ信仰の有り様を推察することが出来る。

インドに侵出したクシャン王として有名なヴィーマ・カドフィーセスの貨幣の意匠にシヴァ神のタイトル *Sarvalokeśvara Mahēśvara* が見え、カニシカ王やフヴィシカ王が統治を認められた神々として貨幣の裏に用いた意匠に乗り物 *Nandin* と共や独立で、或いはシヴァの神妃ウマーや息子スカンダが用いられているように、当時の社会に於けるシヴァ信仰の隆盛の様を推察することが出来る。マトゥラー考古博物館には紀元前1世紀の浮き彫りにスキタイ系の人々がリングを崇拝している様子 (Dampir Park 出土) や、聖樹の前に設けられた柵に囲まれた聖域にリングがそびえ、それをヤクシャのような人々が護っている様子 (Bhuteswara 出土) が描かれ、その信仰が異民

族層にも達していた可能性を示し、そうした霊場の存在を示している。

マトゥラー市内で次に顕著な宗教は仏教であったようである。マトゥラー市内のマター・ガリー (Mātā Gālī) 付近からは大衆部に属していた僧院の存在を伺わせる碑文が発見され⁽⁸⁾、その僧院は *Cutaka vihāra* (Mango Monastery) と呼ばれていた。ガウガートの井戸 (Gau-Ghāt Well) 付近からは正量部の僧院の存在を伝える碑文が発見されており⁽⁹⁾、正量部に属し *Sri-vihara* と呼ばれる僧院内に菩薩像が建立されたことが述べられている。更に、有名なマトゥラーの獅子柱頭銘文⁽¹⁰⁾には説一切有部の存在がうたわれていることから、マトゥラー市内では、大衆部、正量部、説一切有部といった部派仏教が隆盛であったことが判明している。

マトゥラー郊外の宗教活動：

その他の地域の仏教寺院について、マトゥラー市の南から約三キロの地点にあり、監獄があったことから Jail Mound としても知られていたジャマールプル・マウンド (Jamālpur Mound) には、クシャン時代には、カニシカ暦51年と77年の碑文から明らかなように、クシャン王朝の諸王の中でもアフガニスタンのワルダックからマトゥラーまでを支配し、その治世が最も長かったといわれるフヴィシカ王の名を冠した寺院が存在したといわれる⁽¹¹⁾。また、その側には、帰属は不明であるが、カカティカと呼ばれる部派の僧院が存在していたことも指摘されている⁽¹²⁾。更に、マトゥラー市の西に隣接するカトラー・マウンド (Kaṭrā Mound) からは多くの出土品が発見されており、それらに記された碑文から、クシャン朝期⁽¹³⁾からグプタに朝期⁽¹⁴⁾にかけて仏教寺院が存在していたことが推測されている。カトラーの南にあるブーテサル・マウンド (Bhūtesar Mound) からは、書体からマトゥラーがインド＝スキタイの支配下にあった頃と比定される欄循の柱5基が発見されており、その柱にはジャータカのレリーフが描かれていたという。そして、

この柱の存在から仏教のストゥーパが存在していた可能性が指摘されている。そして、カトラーから南西に1.6km. の地点にあるチョウバーラ・マウンド群 (Caubhāra Mounds) では、そのマウンドAからストゥーパ跡と凍石製の舍利容器が発見され、マウンドCから仏像の頭部が、そしてマウンドDからは金製の舍利容器が発見されている。この地から出土した碑文の書体の分析から紀元1世紀頃には既にストゥーパが存在し、カニシカ暦33年には、その寺がマドゥラ・ヴァナカ (*Madhuravanaka*、マドラの森の僧院) という名で知られていたという⁽¹⁵⁾。更に、マトゥラー市の西にあるゴヴァルダン山の東南の麓にあるアンヨール (Anyor) から、サカ族の在俗信者スシャ・ハールシャ (Susa Hārṣa) が、両親と共に一切衆生の利益安楽のためにウッタラ・ハールシャ寺 (Uttara Hārṣa) という寺に仏像を建立したことを伝える碑文⁽¹⁶⁾が発見されている。クリシュナ信仰の中心地であるゴヴァルダン山の麓の村アンヨールには、クシャン時代或いはそれ以前から仏教寺院が存在していたことがこの碑文からも理解される。更に、カニシカ暦51年の碑文⁽¹⁷⁾によって、この仏教寺院が大衆部に帰属し、その寺院に菩薩像が建立されたと述べられている。その他、マトゥラーの西南西4.8kmの地点にあるギリダルプル・マウンド群 (Girdharpur Mounds) には元々大きな貯水タンクと仏教のストゥーパがあったといわれている。

このような仏教寺院は王侯貴族の寄進や上述のカニシカ暦28年のマトゥラー碑文と同様なギルドへの信託投資からの利息の利用というアレンジメントによって運営されていたことが推測される。紀元前70年頃のものとする、マトゥラー出土獅子柱頭銘文には、その地を治めていたサカ族の王ショーダーサが土地を説一切有部の比丘ブッダデーヴァに施与し、永代下賜としたことが伝えられ、王族による土地の寄進の例が認められる。このような王族・封建諸侯による仏教教団への土地の寄進の風も、後のクシャン時代にも受け継がれていったらしい。ギルドへの信託投資によって得られた利子を布施とい

う宗教行為に用いるというシステムはサータヴァーハナ朝下の西インドで行われていたが、北インドのマトゥラーでもバラモン僧に対して行われていたことを考え合わせると、同じような風習が仏教寺院や他の宗教施設に対しても行われていたものと推測することができる。

更に、時代的に、リュウダースがグプタ王朝以前の時代のものとする碑文では、僧院の維持管理が僧から委嘱された在家者の僧伽委員 (*Samghaprakṛta* : “Commissioners of the Community”) によって為されていたケースの存在することを指摘している⁽¹⁸⁾。そして、ジャマールプル出土柱基銘文には、バドラゴージャを首位とする僧伽委員らが柱基を寄進したことが記されており⁽¹⁹⁾、同様な銘文が更に4点存在するという⁽²⁰⁾。ラクナウ博物館蔵のジャマールプル出土石刻銘文⁽²¹⁾では、カカティカ (*Kakatika*) というその土地の仏教部派に属する僧院に、調理用の石版 (*Cooking Stone*) が、スターヴァラジャータ、ブッダラクシタ、ジーヴァシュリー、ブッダダーサ、サンガラクシタ、ダルマヴァルマン、ブッダデーヴァ、スキラ…らからなる僧伽委員会の人々によって据え付けられたことが述べられ、更に、それら僧伽委員会のメンバーは総て商人であることが明記されている。これらの碑文は、商業資本階層に属する在家信者が、一部教団に関してではあるが、一種の管理組織を形成し、僧院の維持管理に関係していたことを示唆しているものと考えられる。

マトゥラー市郊外の宗教センターとして注目されるのが、カンカーリー・ティーラー (*Kankāli Tilā*) であり、ジャイナ教の中心であったことが知られている。Harding、Cunningham、Growse、Burgess、Führerらがこの地を発掘したが、この地からは、シュンガ王朝に遡ることの出来るジャイナ教の寺院跡とストゥーパの存在が報告されている。このジャイナ教のストゥーパに関しては、V.A. SmithがFührerの資料をまとめた図録を出版している⁽²²⁾。更に、この地で発見されたクシャン王朝期のカニシカ暦48年と60年

の碑文からも、ジャイナ教の信仰が当時の経済力を有していた階層に支持され盛んであった様が伺える⁽²³⁾。そして、上述のカトラー・マウンドからもジャイナ教関連の碑文が発見されており、ジャイナ教寺院の存在が推測されている⁽²⁴⁾。ジャイナ教はこのカンカーリー・ティーラーを中心に栄えたといわれているが、更に、マトゥラー市内やその周辺地域からは、表面にジャイナ教のストゥーパやティールタンカラら、様々な複雑な文様を刻したアーラーギャパタ (*ārāgyapata*) と呼ばれる奉獻石板が多数発見されており、これらの石版もジャイナ教信仰の隆盛の様を伝えている⁽²⁵⁾。

マトゥラー市の南西約 5 km の地点のマホーリーからは、高さが 115cm もあり紀元前 3 世紀頃のものとするぼってりとした太鼓腹をして立て膝をして座すヤクシャ像が発見されている (Mathurā 博蔵 C 3)⁽²⁶⁾。また、マトゥラー市の南にパールカム (Pārkhām) からは、紀元前二世紀の半ば頃の巨大なクベラ像が発見されている。アグラ=マトゥラー街道の約 24 km の地点の東側の地点から、1882/83年に土地の人々がデーヴァター (*devatā*) と呼ぶ巨大な灰色の砂岩製のヤクシャ像が発見され、現在マトゥラー博に収蔵されている⁽²⁷⁾。台座を含め高さ 2.6m あり、ドーティーという腰巻きを着した太ったヤクシャ像で、台座の上に紀元前 2 世紀の中葉頃のブラーフミー文字で、「マーニバドラのグループに属す 8 人の兄弟によって『聖なるもの』の像が造られた。クニカの弟子のゴーミトラカの作である」、と記されていた⁽²⁸⁾。また、マトゥラー考古学博物館には、同じくパールカム地域で発見されたクベラ像で、「ナフサミトラの請いによる」[“the request of the venerable(Na)hushami(tra)”] という碑文⁽²⁹⁾を記すクベラ像 (収蔵番号 1266) も収蔵されている。更に、同博物館には、同じくパールカム地域で発見されたクベラ像 (収蔵番号 1264) があり、碑文の断片が認められる⁽³⁰⁾。また、パーリケラ (Pālikhera Mound) からは、表面に角状の杯を右手に持つ腹の出たクベラに 3 人のクシャン時代系の衣装を付けた者たちが酒を勧

める像で、裏面は、酩酊したクベラが二人のギリシア風の衣装を付けた人物に支えられる様が描かれる Bacchanalian Group に属するヤクシャ像が発見されている⁽³¹⁾。発見されているものはクシャン朝以前の遺品であるが、パールカムが紀元前の時代からヤクシャ信仰の重要なセンターであったことは明らかである。また、Bacchanalian Group というグループ名称を与えられている酩酊したヤクシャ像にはガンダーラのディオニソス信仰の影響が認められ、ヤクシャ信仰が異民族侵入期に外来文化からの影響を受けながら存続していた姿を認めることが出来る。

杉本卓洲博士は、西暦紀元1世紀頃の作である Gwarior の Pawāya 出土のヤクシャ立像の台座に刻された銘文の寄進者名をもとに、一部のバラモンたちがヤクシャ信仰に関わり、シヴァ神を信奉する人々にもヤクシャ・マニバドラは崇拝されていたことを指摘しており、ヤクシャ信仰の有り様を示すケースとして注目される⁽³²⁾。仏典の『アングッタラ・ニカーヤ』には、マトゥラーの大地はでこぼこしていて埃っぽく、獐猛な犬が至る所において、猛々しい *Yakkhas* (*Yaksas*) がはびこり、人々から布施をもらうことは難しい場所であった、というマトゥラーの五つの障りに関する記述があるが⁽³³⁾、『アングッタラ・ニカーヤ』の記述からも、ヤクシャ信仰が仏教伝来以前からこのマトゥラーの地に栄え、その後もマホーリーやパールカムという霊場を中心に栄えていたらしい。

マトゥラーから、北西に4.8km と9.6km の地点にあるラール=バダール・マウンド (*Rāl-Bhadār Mound*) からはナーガ信仰の跡が発見されている。この地からは、二人のナーギーを伴ったナーガ像が発見され、その台座にはカニシカ暦8年の碑文があり、この聖なるナーガに対して貯水タンク／溜池と園林が一切衆生のために寄進されたと記されている⁽³⁴⁾。また、マトゥラーの西南西4.8km の地点にある村であるギリダルプルには元々大きな貯水タンクと仏教のストゥーパがあったというが、ギリダルプルの村から槍を手に

持つ男性像を伴ったナーギーの像が刻まれたレリーフが発見されており、仏教とは別か、仏教と何等かの関係を有しながらナーガ信仰の霊場として栄えていたことが推測されている⁽³⁵⁾。マホーリー村とウスパール村を結ぶ道路 (Maholi-Usphār Road) から、ナーガ像の断片が発見され、400年頃の文体で書かれた碑文に「外套製造業者バヴァナンディン (Bhavanandhin) の息子アシュヴァデーヴァ (Aśvadeva) の…」⁽³⁶⁾と記され、5世紀になっても外套製造業者の一部が根強くナーガ信仰を維持していたことが知られている。更に、マトゥラー市の真南に16kmのところにあるチャリーガーオン (Chhargāon) からは、1908年にナーガの立像 (マトゥラー博蔵) が発見されている。その碑文⁽³⁷⁾には、フヴィシカ王の40年にピンダパイヤ (Pindapayya) の息子セーナハスティン (Senahastin) とヴィーラヴリッディ (Viravrddhi) の息子ボンダカ (Bhondaka) がナーガ像を彼の貯水タンクに建立したことを記している。これは、明らかにクシャン王朝下に、ナーガ信仰のセンターとしての貯水タンク、或いは溜池が存在していた可能性を示唆するものであり、独立したナーガ信仰のスポットが存在したことを物語っている。ナーガに関わる遺物が仏教のストゥーパなどの近くから出ているケースだけでなく、独立したサンクチュアリーを有していたと考えられるケースが明らかに認められ、民衆はこういったナーガのサンクチュアリーに参り、*bhagavat* と尊称されたナーガに祈願したのである。

更に興味深い事例は、フヴィシカ寺が存在したジャマールプル・マウンド (Jamālpur Mound) である。カニシカ暦26年の段階ではこの地にはナーガの祠堂が存在し、ダディカルナ竜王 (*Dadhikarnṇa*) が祀られていたことが解っている⁽³⁸⁾。チャーンダカ兄弟というマトゥラーの俳優の息子たちがこのナーガの祠堂に石板を奉獻しているのである。更に、カニシカ暦77年にこのダディカルナ竜王の祠堂の司祭デヴィラがフヴィシカ寺に柱基を寄進しているのである。この碑文の存在は、ダディカルナ竜王の祠堂がこのジャマー

ルプルに於いて仏教寺院と併存して存在し、然も両者が密接な交流を保ちながら半世紀以上存在していたことを示す資料として注目され、民間信仰が仏教と共存繁栄していた事実を物語っているのである。サカ王ショーダーシャの時代に或バラモンの財政官が、この地に「ペアーとなっている貯水池の西側の貯水池と園林、柱、石盤を作らせた」といわれるように、そのバラモンの財政官が貯水池を寄進した対象とは、この地に於いて民衆の信仰を集めていたこのナーガの祠堂に祀られていたダディカルナ龍王ではなかったかとも推察される。

最後に、マトゥラーの西南22km程の地点に存在するソク (Sonkh) について一言付言する。ジャマールプルのケースのようにナーガの霊場には、*sthāna*、とか *devakula* と呼ばれる祠堂が存在し、*devakulika* と呼ばれた祭官が管理していたらしい。ソクはベルリンの Museum of Indian Art が派遣したドイツの調査隊によって1966年から1974年にかけて発掘調査され、その結果は Herbert Härtel によって *Excavations at Sonkh*⁽³⁹⁾ という報告書に纏められ出版されているが、その報告書によると、ソクのメイン発掘エリアの北方のエリアに、前方後円の形状をしたアプシダル寺院を伴うナーガ信仰の僧院跡が発見されたというのである。この寺院には主に二つの発展段階があり、Phase I が紀元前一世紀初め頃、Phase II は2世紀後のカニシカ王の治世の初め頃のものであったという。Phase I から Phase II に至る間、アプシダル寺院の周囲に排水溝など幾つかの建物が増築されていたことが建造物に用いられていた焼き煉瓦のサイズの変化などからも解り、この寺院が二世紀以上継続的に信仰の対象として栄えていたことが明らかにされている。発掘結果を総合すると、この寺院跡全体は、周囲が43m×33mの長方形をしていたという。その周囲は、サンチーやバールフットのストゥーパの玉垣の欄循と同様な高さが1.35mある欄循によって囲まれていたという。この寺院の南側には高さ3.45mもある門 (*torana*) が設けられていたという。トーラ

ナの3本の横材の内、一番下の横材の中央部分(128cm×21cm×16.4cm)と西側の先端が丸まった張り出し部分3つ(上から67×23.2×17.5cm、71×22.5×19.5、72.1×21.6×16.4cm)が発見されている。それらを総合すると、最上部が2.4m、真ん中の横材が2.5m、最下部の横材が2.6mの長さであったという。発掘者ハーテルは、特にPhase IIから発見されたトーラナやその横材・柱の彫刻の分析や、その他、ナーガ像やナーガのテラコッタ像の破片等々ナーガをモチーフとした数多くの彫刻が発掘されていることなどから、ヴァースキ龍王を祀った寺院だったと結論している。

おわりに：

インド・ギリシア、サカ族、パフラヴァ族、クシャン王朝などの異民族支配下にあった西北インド・北インドは、経済的には繁栄期にあった。その経済繁栄を背景に、北インドの中心都市マトゥラーではさまざまな宗教が活発な活動を行い栄えていた。マトゥラー市内から発見された碑文はインドの正統バラモン教やヒンドゥー教のヴィシュヌ信仰、そして大衆部・説一切有部・正量部などの部派仏教の僧院の繁栄を伝えている。また、マトゥラー市の周辺地域では、カトラー・マウンドを中心にジャイナ教が、パールカムなどを中心にヤクシャ信仰が、そしてジャマールプル・マウンドやチャーリーガーオンを中心にダディカルンナ龍王など様々なナーガラージャに対するナーガ信仰が栄えていた。特に、仏教やバラモン教に目を向けてみると、地方領主などの有力者たちが自分たちの富を生産者のギルドに投資してその利息を布施に回すという、当時の経済活動と密接な関係を保つシステムによって宗教の保護を行っていたことも解っている。更に、マトゥラーの一部僧院では、商人からなる管理委員会によって僧院の維持が行われていたことも判明している。サカ・クシャン時代の経済繁栄は様々な形で、当時の宗教活動に影響を与えていたが、その際たるものはナーガ信仰である。ソクの大規模なデー

ヴァクラの存在は、将に単なる民間の信仰がバラモンを中心とする組織化された宗教に変容を遂げていた様を物語っていると考えられる。また、ヤクシャ信仰はバラモン教との関係を維持しつつ栄え、一部地域ではナーガ信仰が仏教やジャイナ教と共存する形で霊場化していることが解り、マトゥラー市を中心とする地域からの出土物は、「宗教の坩堝」的環境がマトゥラー地域には存在したことを物語っている。「総てのものの存在意義を認める社会」とはそんな「宗教の坩堝」的環境を成立させていたであつたと考えられる。

註記

- (1) H.Lüders, *Mathurā Inscriptions.*, § 94.
- (2) *Epigraphia Indica*. Vol.XXI, pp.55ff., No.10.
- (3) H.Lüders, *op.cit.*, § 99, § 145.
- (4) *Manu.*, ii, 19
- (5) *E.I.* vol.XXIV, p.194.
- (6) *Memoir of A.S.I.* no.5, p.170.
- (7) Gerard Fussman, "Māṭ devakula: A New Approach to its Understanding", *Mathurā: the Cultural Heritage*, American Institute of Indian Studies, New Delhi, 1988, pp.193ff.
- (8) H. Lüders, *op.cit.*, § 79.
- (9) *Ibid.*, § 80.
- (10) Sten Konow, *Kharoṣṭhi Inscriptions*, CII, Vol.II, p.48f., No.15.
- (11) H.Lüders, *op.cit.*, § 29 & 31.
- (12) *Ibid.*, § 58, § 65.
- (13) *Ibid.*, § 3, 4, 5, 6, 7.
- (14) *Ibid.*, § 8,& 10.
- (15) *Ibid.*, § 24.
- (16) *Ibid.*, § 135.
- (17) *Ibid.*, § 134.
- (18) *Ibid.*, § 84.
- (19) *Ibid.*, § 47.
- (20) *Ibid.*, § 48-51.
- (21) *Ibid.* § 65, pp.101-102.
- (22) V.A. Smith, *The Jain Stūpa and Other Antiquities of Mathura*, Indological Book House, Varanasi, 1969.

- (23) H.Lüders, *op.cit.* § 14 &15
- (24) *Ibid.*, § 9.
- (25) Eg., V. A. Smith, *op.cit.*, pls. VII to XIII.
- (26) J. Vogel, *Archeological Museum at Mathura*, Indological Book House, Delhi, 1971 Pl.XIV.
- (27) *Ibid.*, C1.
- (28) H. Lüders, *op.cit.*, § 83. [Lüders translates: "The image of the Holy One was cause to be made by eight brothers, members of manibhadra [Manibhadra] congregation. It has been made by Gomitaka [Gomitraka], pupil of Kunika."]
- (29) *Ibid.*, § 140.
- (30) *Ibid.*, § 141.
- (31) Vogel, *op.cit.*, C2, pl.XII.
- (32) 杉本卓洲、「Yaksa と菩薩－Mathura の仏教をめぐって－」、『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』、第3号、昭和58年、pp.81－82.
- (33) *Anguttara Nikāya*, CCXX, 1-2; *Anguttara Nikāya* (edited by E.Hardy) pt.III, London, 1896, p.256.E.M. Hare, Trans., *The Book of the Gradual Sayings*, London, 1932-36, p.188.
- (34) H. Lüders, *op.cit.*, § 102.
- (35) *Ibid.*, § 161.
- (36) *Ibid.*, § 133.
- (37) *Ibid.*, § 137.
- (38) *Ibid.*, § 27.
- (39) Herbert Härtel, *Excavations at Sonkh*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 1993.